

問題【社会】

明治時代の外交に関して次の問いに答えなさい。

- ① 第1次伊藤内閣のもとで欧化政策を行った外務大臣は誰ですか。
- ② 1986年にイギリス汽船が紀伊半島沖で沈没した事件を何と言いますか。
- ③ 1894年に領事裁判権が撤廃された、イギリスとの間で締結した条約は何ですか。
- ④ ③のときの外務大臣は誰ですか。
- ⑤ 1911年に関税自主権を回復したときの外務大臣は誰ですか。

豆知識 雑学コラム

条約改正、長い道のり

明治時代の様々な改革によって近代化を進めていく日本ですが、欧米列強と対等な関係を目指すうえで条約改正は大きなテーマでした。1911年に関税自主権が回復するまでどのような流れだったのかを確認していきましょう。

まず条約改正に取り組んだのは、岩倉使節団が交渉にあたります。岩倉具視を中心に交渉を行いますが、予備交渉の段階で決裂してしまいます。交渉は中止になるものの、欧米の現状を肌で感じ取った経験は大きく、日本に帰国後の政治に大きく影響を及ぼしました。

次にあげられるのは井上馨による欧化政策でしょうか。欧米の制度や生活様式などを模倣することで、欧米の関心を集めることに努めます。さらに鹿鳴館を設けて西洋式の舞踏会を開きました。しかし、改正案の内容から反対運動が起こったり、ノルマントン号事件などもあったため交渉はうまくいきませんでした。ノルマントン号事件により、日本国内では領事裁判権の撤廃を求めていく世論が高まることになります。

条約改正がうまくいかない状態が続きますが、世界情勢により大きく前進します。ロシアが東アジアへの影響を及ぼすことを警戒したイギリスが、日本と日英通商航海条約を結びます。関税自主権はまだ完全に回復できてはいないものの、領事裁判権の撤廃に成功します。これには日本は憲法や内閣制度が整っていたこと、東アジアへの影響力を持っていたことも大きく関係あったと思います。イギリスと条約を結んだことで他の欧米各国とも条約の締結に成功します。その後、日清戦争、日露戦争などを経て国際的な地位も確立しつつあった日本は1911年に関税自主権を完全に回復することになります。

こうして欧米列強と対等になるまで力をつけた日本ですが、条約改正には長い年月がかかっています。信頼関係と一緒に「外交は一日にしてならず」ですね。

【解答】

- ①井上馨 ②ノルマントン号事件 ③日英通商航海条約 ④陸奥宗光 ⑤小村寿太郎